

中高ドイツ語における借用語について

須 沢 通

1 ドイツ語史における超地域的な言語の確立を目指した最初の試みとしてのシュタウフェン朝宮廷詩人語について、従来の研究は、この言語を否定的選別により成立した人造語 (Kunstsprache)¹⁾、あるいは特定社会層における文学的コミュニケーション手段のための機能語 (Funktiolekt)²⁾と性格づけ、ここにシュタウフェン家のアレマン方言を Prestige とした超地域的文章語、もしくは文学的共通語の傾向を認めてきた。この場合、言語の超地域性を示す最大の根拠は、各詩人が同一の押韻を目指したこと、すなわち地方によって音の異なる不純な韻を避けたことに置かれた³⁾。しかしこれに関する最近の研究では、宮廷詩人たちの押韻使用と、それに対する姿勢に統一性、超地域性を示す積極的根拠を見出せないこと、ただ彼らが他の言語地域およびその言語の存在を意識し、それが押韻という整合性が求められる詩作上の技法に反映したことで、彼らの言語使用に一定の共通性が認められることが指摘されている⁴⁾。

一方、この時代の宮廷詩人たちが洗練された宮廷的言語様式の形成のためいわゆる民衆叙事詩 (Volksepos) で広く用いられた古いことばを意図的に避けたこともこの言語の特徴としてあげられている⁵⁾。この問題に関しても最近の研究では、古語に対する拒否的態度とともにこれを積極的、発展的に取り入れる全く対蹠的な姿勢もうかがえるなど、詩人たちの古語に対する態度が必ずしも一様ではないものの、いずれの場合もより洗練された宮廷的言語芸術確立のための試みであり、ここに彼らの言語使用に対する共通の姿勢が確認されている⁶⁾。

このように自分の方言圏を超えたより広い地域とその言語を意識し、独自の詩法によるものの共通して洗練された言語の宮廷的様式の形成を目指した宮廷詩人語のもう一つの特徴にフランス語からの借用語 (Lehnwörter) 使用があげられる⁷⁾。

2 ドイツ中世盛期の宮廷文学はその素材、モチーフ、様式の範をフランスの宮廷文学に求めた。したがってドイツの宮廷詩人にとって、フランス語の表現法の採用は、自身の詩の elegant な言語様式形成のために欠かせないものであった。とりわけ豊富なフランス語からの借用語は、宮廷詩人語としての彼らの言語を通時的、共時的に区別し、特徴づけている⁸⁾。

このフランス語からの借用語を自らの詩の表現法に積極的に取り入れた最初の詩人は Hartmann von Aue とされる⁹⁾。さらにフランス語を中心とした借用語を最も積極的に、いわば自由奔放に使用したとされるのが Wolfram von Eschenbach である¹⁰⁾。この二人の詩人と、それ以前の12世紀半ばに書かれ、やはりその素材と形式の手本をフランス語に求めたドイツ語詩のフランス語からの借用語の数を比較すると次のようになる¹¹⁾。

Reinhard Fuchs	11
Kaiserchronik	12
Alexanderlied	24
Rolandslied	39
Hartmanns Erec	81
Hartmanns Iwein	32
Wolframs Parzival	239

本稿では Hartmann と Wolfram のフランス語を中心とした借用語の特徴について考察する。この場合の借用語とは、12世紀を中心にはじめてドイツ語に借入されたもので、さらに広義の借用語をさす。すなわちドイツ語の言語体系に編入・同化された狭義の借用語 (tanz < afrz. dance ダンス) のみならず、もとの言語の言語体系に従った外来語 (roys < afrz. roys 王) もこれに含まれる。また借用語を構成要素としてドイツ語で新たに形成された複合語 (Kompositum), 派生語 (Derivatium) についても、造語の構成成分である借用語の形態素を調査の対象とした。例えば valsch (adj. 不誠実な), valschlich (adj. 不誠実な), valschheit (stf. 不誠実), valschheitswant (stm. 不誠実の破壊者) はいずれもフランス語からの借用語 valsch (adj.) 1語として分類した。さらに、例えば mhd. clâr (nhd. klar 澄んだ, 明るい) のように本来ラテン語 (Lat.) clarus (遠くまで響きわたった) からの借用語と考えられる単語も、実際には中高ドイツ語 (Mhd.) と同義の古代フランス語 (Afrz.) cler の影響により12世紀に低地ライン地方からドイツ語圏の広い範囲に流行したことから、ここではフランス語からの借用語として扱った。しかし一方で、特にラテン語起源の借用語において、これが直接ラテン語から借用したものか、フランス語を経由して借用されたものか判断の難しい単語も少なからず見られる。この場合もより強い(と考えられる)可能性によっていずれかに分類を試みた。したがって統計結果にはある程度の誤差が見込まれる。

3 Hartmann の Erec¹²⁾ と Iwein¹³⁾ および Wolfram の Parzival¹⁴⁾ におけるフランス語からの借用語とそれ以外のラテン語を中心とした借用語およびこれを構成要素とした派生語、複合語の品詞別 [名詞 (Subst.), 動詞 (Verb), 形容詞 (Adj.), 前置詞等 (Prp.)] の数と、さらに派生語、複合語を含め詩の中で用いられた用例数の統計をとると次のようになる。

Erec (10191 Verse)

		Subst.	Verb	Adj.	Prp.	Gesamtzahl
Lehnw.:	frz.:	58 (72%)	12 (15%)	6 (7%)	5 (6%)	81
	lat. u. a.:	10 (83%)	1 (8%)	1 (8%)		12
Deriv. u.	frz.:	2		2		4
Kompos.:	lat. u. a.:	2		3		5

Zahl der	frz. :	257	46	9	40	352
Belege :	lat. u. a. :	145	1	17		163

Iwein (8166 Verse)

		Subst.	Verb	Adj.	Prp.	Gesamtzahl
Lehnw.	frz. :	21 (66%)	9 (28%)	2 (6%)		32
	lat. u. a. :	6 (86%)		1 (14%)		7
Deriv. u. Kompos. :	frz. :	1		1		2
	lat. u. a. :	2		1		3
Zahl der Belege :	frz. :	95	19	6		120
	lat. u. a. :	52		16		68

Parzival (24812 Verse)

		Subst.	Verb	Adj.	Prp.	Gesamtzahl
Lehnw. :	frz. :	177 (74%)	38 (16%)	15 (6%)	9 (4%)	239
	lat. u. a. :	129 (97%)	2 (1.5%)	2 (1.5%)		133
Deriv. u. Kompos. :	frz. :	16	4	8		28
	lat. u. a. :	9	3	3		15
Zahl der Belege :	frz. :	2035	221	279	109	2644
	lat. u. a. :	715	14	29		758

古くからドイツ語に大きな影響を与えてきたラテン語は、中世盛期の宮廷文学では、一旦影をひそめ、代わってフランス語がドイツ語に大きな影響を及ぼすことになる。E. Öhmann¹⁵⁾によると、フランス語からドイツ語に受け入れられた借用語は、12世紀には約300語、13世紀には約700語に達し、14世紀には再び約300語になった。また H. Palander¹⁶⁾と H. Suolahti¹⁷⁾によれば、12世紀には235語の借用語が、さらに13世紀には約1200語の借用語がフランス語から導入された。12、13世紀に隆盛をみたフランス語からの借用語はその後減少していくが、しかし A. Rosenqvist¹⁸⁾によると、14世紀には、すでにドイツ語に存在したフランス語からの借用語を構成成文とした新しい派生語が数多く造られ、14世紀後半にはこの時期にフランス語から借用された単語の5倍に達した。このことは中世盛期の宮廷詩人たちにフランス語起源の派生語および複合語がほんのわずかしき見られないことと対照的である。

15世紀以降のドイツ語における借用語数の変動については A. Kirkness¹⁹⁾に見ることができる。

	Franz.	Lat.	Gesamtzahl der Wortentlehnungen
15 Jh.	20 (6%)	257 (79%)	326
16 Jh.	145 (11%)	936 (71%)	1327
17 Jh.	500 (39%)	523 (41%)	1268
18 Jh.	863 (52%)	488 (29%)	1672
19 Jh.	378 (47%)	155 (19%)	804
20 Jh.	35 (20%)	16 (9%)	173

この結果、フランス語からの借用語について、13世紀と18世紀に二つの隆昌を確認することができる。Hartmann と Wolfram は第一次隆昌期にさしかかる12世紀末から13世紀初頭に詩作活動した宮廷詩人で、彼らの作品においても豊富なフランス語からの借用語が見られる。この借用語の1000行における頻度は

Erec	7.9	Iwein	3.9	Parzival	9.6
------	-----	-------	-----	----------	-----

となる。Hartmann の初期の作品 Erec と後期の作品 Iwein の借用語数とその頻度の比較から、Hartmann が前期の作品で積極的に取り入れた外国語からの借用語を後期の作品では抑制しようとしたことがうかがえる。これは Hartmann の押韻使用および古語に対する姿勢と共通する。彼は Erec ではまだ見られた方言的色彩の強い押韻語の使用を Iwein では意図的に避け²⁰⁾、また Erec で示された古風なことばを控える姿勢を Iwein でさらに徹底させた²¹⁾。このような姿勢が Hartmann の言語使用に対する基本姿勢であった。これに対して Wolfram は外国語からの借用語を積極的に導入したが、これらの借用語は、彼の作品で数多く用いられた古風なことばとともに、Wolfram の詩の表現法を豊かなものとし、彼の言語様式を特徴づけるものとなった。

4 ドイツ語の全借用語に占めるフランス語およびラテン語からの借用語の割合について、15世紀以降の変動を、前出の A. Kirkness の統計、および P. v. Polenz²²⁾による《Deutsches Fremdwörterbuch》の分析に見ることができる。Polenzによると、1460年～1479年の20年間にラテン語からドイツ語に入った借用語は、この期間にドイツ語が受け入れた外国語からの借用語全体（いくつかの理由から若干のものを除くが）の81%であったが、その後ラテン語からの借用語の割合は下降し、1480年以降の20年～40年間で69%～61%と減少した。これと反比例してフランス語からの借用語の割合は上昇し、1479年までの1.3%は、その後、6%～12%と急激に増大した。フランス語の割合がピークに達する18世紀末には、フランス語は約60%となり、対照的にラテン語の割合は28%にまで減少する。このような傾向は Kirkness でも確認され、フランス語からの借用語はその最盛期である18世紀には全体の52%を占めている。

12世紀を中心にドイツ語に受け入れられた借用語中、フランス語からの借用語の占める割合は、宮廷詩人の各作品で次のようになる。

Erec	87%	Iwein	82%	Parzival	64%
------	-----	-------	-----	----------	-----

この数字は、その後のドイツ語における借用語の全体的な傾向と比較しても特異であり、この点からもフランス語からの借用語使用は宮廷詩人語の大きな特徴といえる。

また借用語に占める各品詞の割合も、受け入れ側の言語の言語様式を知るうえで重要である。W. J. Jones²³⁾は、借用語の品詞のなかで特に形容詞が受け入れ側の言語の言語様式を豊かにする役割を果たしたとして、借用語に占める形容詞の割合を重視した。Jones の1575年～1648年における分析によると、フランス語からの借用語で名詞の占める割合は1575年と1625年の間で84%から54%への下降が見られるのに対して、動詞の割合は1600年頃には6.4%から11%～23%への上昇が、また形容詞の割合も1630年頃に1.2%～6%から10.5%～13.7%への上昇が見られた。さらに R. J. Brunt²⁴⁾も18世紀半ばのフランス語からの借用語の最盛期に形容詞の占める割合が15.26%に達したことを指摘している。この時代のドイツ語は豊富なフランス語からの借用語、そのうち特に多くの形容詞を受け入れることによって、単語と名称の数を増加させるばかりでなく、言語の様式と内容をも豊かにした。

これに対して中世盛期の宮廷詩人のうち特に豊富な借用語を取り入れた Wolfram では、フランス語からの借用語のうち名詞が占める割合は74%、動詞は16%、形容詞は6%となるが、この数値は Jones による16世紀後半から17世紀前半にかけてのフランス語からの借用語に関する分析と同様である。このことは、中世盛期の宮廷詩人語では豊富なフランス語からの借用語が主として単語と名称を豊かにする目的で利用されたことを示している。

5 中世盛期の宮廷詩人たちは、フランス語からの借用語の多くを、フランス宮廷文化のドイツへの紹介、もしくは導入のために使用した。それゆえ、これらの単語は、特定の分野に集中している。以下に Hartmann と Wolfram におけるフランス語からの借用語をそれぞれ 1. 騎士文化, 宮廷生活 2. 軍事, 武具 3. 娯楽 4. 贅沢品 5. その他 に分類し²⁵⁾、分野別の単語数とそこにおける品詞の割合を見る。この場合、各分野には当該項目の概念と対照をなす単語も含まれる。例えば、1. の騎士文化, 宮廷生活 には、barûn (男爵), joye (喜び), prîs (称賛) の宮廷的な単語とともに vilân (田舎者, 粗野な人), kumber (心痛), salluire (嘲りのことば) のような対蹠的な単語も含まれている。さらに、それぞれの分野の単語のうち、今日のドイツ語にまで生き残った単語 (Reliktlehnwörter = Rel.) についても、すでに古風なものとして扱われているものも含め、その数と残存率 (Überlebensquote = Üblq.) を調査した。なお Hartmann における () のなかの数字は、Wolfram には現れず、Hartmann のみに見られる単語の数である。

Erec

	Subst./Rel.	Verb/Rel.	Adj./Rel.	Gesamtz.	Üblq.
1.	26(10)/10(2)	4(1)/2(0)	3(2)/1(0)	33(13)/13(2)	39%
2.	16(4)/ 8(1)	6(0)/2(0)	0	22(4)/10(1)	45%
3.	3(2)/ 2(1)	1(0)/1(0)	0	4(2)/ 3(1)	75%
4.	9(3)/ 4(0)	1(0)/0	0	10(3)/ 4(0)	40%
5.	4(3)/ 2(1)	0	3(3)/0	7(6)/ 2(1)	29%

Gesamtz.	58(22)/26(5)	12(1)/5(0)	6(5)/1(0)	76(28)/32(5)	
Üblq.	45%	42%	17%	42%	

Iwein

	Subst./Rel.	Verb/Rel.	Adj./Rel.	Gesamtz.	Üblq.
1.	8(1)/ 5(0)	2(0)/1(0)	2(0)/2(0)	12(1)/ 8(0)	67%
2.	5(1)/ 3(0)	5(0)/2(0)	0	10(1)/ 5(0)	50%
3.	0	1(0)/1(0)	0	1(0)/1(0)	100%
4.	7(3)/ 4(0)	1(1)/0	0	8(4)/ 4(0)	50%
5.	1(0)/ 1(0)	0	0	1(0)/ 1(0)	100%
Gesamtz.	21(5)/13(0)	9(1)/4(0)	2(0)/2(0)	32(6)/19(0)	
Üblq.	62%	44%	100%	59%	

Parzival

	Subst./Rel.	Verb/Rel.	Adj./Rel.	Gesamtz.	Üblq.
1.	59 / 21	9 / 5	12 / 4	80 / 30	38%
2.	48 / 16	17 / 3	1 / 0	66 / 19	29%
3.	11 / 7	7 / 4	1 / 1	19 / 12	63%
4.	32 / 16	4 / 1	0	36 / 17	47%
5.	27 / 9	1 / 1	1 / 1	29 / 11	38%
Gesamtz.	177 / 69	38 / 14	15 / 6	230 / 89	
Üblq.	39%	37%	40%	39%	

さらに Hartmann の Erec, Iwein と Wolfram の Parzival に現れるフランス語からの借用語を集計して、宮廷詩人語としての総合的な統計をとると次のようになる。

	Subst./Rel.	Verb/Rel.	Adj./Rel.	Gesamtz.	Üblq.
1.	70 / 23	10 / 5	14 / 4	94 / 32	34%
2.	53 / 17	17 / 3	1 / 0	71 / 20	28%
3.	13 / 8	7 / 4	1 / 1	21 / 13	62%
4.	38 / 16	5 / 1	0	43 / 17	40%
5.	30 / 10	1 / 1	4 / 1	35 / 12	34%
Gesamtz.	204 / 74	40 / 14	20 / 6	264 / 94	
Üblq.	36%	35%	30%	36%	

各分野に属する借用語には次のようなものが見られる。

1. Rittertum u. ritterliches Leben:

âmîe (恋人), bêâ (美しい), garzûn (小姓), joye (喜び), condewieren (同伴する), cons (伯爵), kumpân (仲間), kurteis (宮廷的な), massenîe (家来), partieren (欺く), sarjant (足軽), suknî (上衣), vilân (田舎人)

Reliktlehnwörter: ärker (出窓>Erker), aventiur (冒険>Abenteuer), barûn (男爵>Baron), bastart (偽物, 私生児>Bastard), bonît (帽子>Bonnet), clâr (明るい>klar), kumber (心痛>Kummer), kumpânîe (同伴, 仲間>Kumpanei), loschieren (陣を張る, 宿泊する>logieren), palas (宮殿>Palast), pavelûne (テント>Pavillon ペビリオン), prîs (賞賛>Preis), prüeven (考量する>prüfen 調べる), stivâl (薄皮の夏用長靴>Stiefel ブーツ), valsch (不誠実な>falsch 偽の), flôrî (花, 輝き>Flor), vermaldîen (呪う>vermaledeien)

2. Kriegswesen u. Ausrüstung:

banecken (馬で駆け回る), bovel (非戦闘員), boye (手枷), hâsche (斧), hurt (衝突), krîe (鬨の声), rabbîn (馬の全力疾走), râvît (軍馬), schillier (膝あて), turkoyte (護衛), feiten (装備する)

Reliktlehnwörter: banier (戦旗>Banner), buckel (楯の中高の金具>Buckel 小高い山, 背中の瘤), buhurt (騎馬試合>Buhurt), harnas (甲冑>Harnisch), kalopieren (ギャロップで走る>galoppieren), lanze (槍>Lanze), rotte (一団>Rotte), solt (兵士への給料>Sold), tjoste (馬上槍試合>Tjost), turnei (馬上試合>Turnier トーナメント), vælen (射誤る>fehlen 欠けている), walop (ギャロップ>Galopp)

3. Unterhaltung:

quater (サイコロの四つの目), rotte (ハーブ), schantiure (歌手), stîven (シャルマイを吹く), toppel (ダイスゲーム)

Reliktlehnwörter: mat (大手詰めの> matt 力のない), parlieren (お喋りをする>parlieren), pensel (筆>Pinsel), pusîne (ラッパ>Posaune), schanze (サイコロの一投, 幸運なケース>Chance), tambûrr (鼓手>Tambour), tanz (ダンス>Tanz), floite (フルート>Flöte)

4. Luxusgüter:

abesto (アベスト, 宝石), galander (とさかひばり), lît (ベット), mursel (御馳走の一切れ), müzzel (香木), sinopel (赤酒), furrieren (裏地をつける), parrieren (正反対の色で混ぜる), safer (青色のガラス玉)

Reliktlehnwörter: amatist (紫水晶>Amethyst), kappûn (去勢された食肉用雄鶏>Kapaun), clâret (蜂蜜酒>Klaret トラレット, 薄赤ワイン), kulter (キルティングの掛布団>Kolter), muscât (ナツメグ>Muskat), rubîn (ルビー>Rubin), samît (ピロード>Samt), scharlachen (深紅色, 赤色の高価な毛織りの生地>Scharlach 深紅色の服地), vinæger (葡萄酒>Vinaigrette ビネグレットソース), florieren (飾る>florieren 花盛りである)

5. Sonstiges:

barel (グラス, カップ), buzzel (壺, 樽), lâtûn (レタス), muntâne (山), rivier (川), seitiez (小船), serpent (龍), ussier (ボート)

Reliktlehnwörter: jeometrî (幾何学>Geometrie), crêatiure (被造物>Kreatur), plân (平野>Plan), quît (義務から解放された>quitt 縁が切れた), quaschiure (打撲傷>Quetschung), feie (妖精>Fee)

以上、フランス語からの借用語を上記の5分野に分類し、分野別の単語数、および借用語のうち今日のドイツ語にまで残った単語の数とその全体に対する割合を調べた。その結果、分野別の借用語数に関しては、Hartmann, Wolframのいずれにおいても1.の騎士文化、宮廷生活に関係するものが最も多く、次に2.の軍事、武具、4.の贅沢品と続くことが確認された。これは、そのまま、ドイツの宮廷詩人たちが宮廷的表現法のために、自身の文学作品で新たにどの分野の借用語を最も必要としたかを示している。また総合的統計において、分野別の借用語のうち今日のドイツ語にまで残った単語の割合を示す残存率を見ると、借用語数の最も少ない3.の娯楽に関するものが最も高く、これに4.の贅沢品が続き、反対に2.の軍事、武具に関する借用語の残存率が最も低くなっている。このことは、その後の時代の展開に取り残された騎士社会に係わった単語の多くが、時代の流れの中でなおも生き残りえなかったことを示している。

作品別に見た借用語の残存率はErec 42%, Iwein 59%, Parzival 39%となる。これに示されるように、Hartmannの後期の作品Iweinでは、数少ないフランス語からの借用語のうち59%という高い割合の単語がその後のドイツ語の言語体系に定着した。このことはHartmannがIweinで、その概念が自分の表現法に不可欠で、それを表す単語が従来のドイツ語の言語体系に不足しているか、存在しても古風など不適切な場合に、フランス語からの借用語を利用したこと、その場合も用法が狭い騎士社会に限定されるものの使用は避けたことを示している。これはIweinにおける1., 2.の分野の残存率の高さにも表れている。これに対してWolframはParzivalでフランス語からの借用語を積極的に受け入れ、すでにドイツ語の言語体系に相当する単語が存在する場合でもこれと重複させ、あるいはドイツ語形を排除して借用語をいわば威信借用語的に使用した。このことはWolframによって初めて用いられた借用語およびWolframにのみ使用された借用語が非常に多いことから裏付けられる²⁶⁾。この結果、Parzivalで使用されたフランス語からの借用語の39%がその後のドイツ語の言語体系に定着できたにすぎない。

この時代以降、フランス語からドイツ語に受け入れられた借用語のうち今日のドイツ語にまで残った単語の割合については、Jones²⁷⁾, Brunt²⁸⁾, R. K. A. Caughey²⁹⁾に見ることができる。彼らによると、1575年~1648年にフランス語からドイツ語に入った借用語のうち今日のドイツ語に残ったものの割合は約28%であったが、1649年~1735年に入ったフランス語からの借用語の残存率は41%、そして1736年~1815年のフランス語からの借用語の残存率は実に78%に達している。これに対してHartmann, Wolframの中世盛期の宮廷詩人が用いた、12世紀を中心に導入されたフランス語からの借用語の今日のドイツ語における残存率は約36%で、これは17世紀、18世紀におけるフランス語からの借用語の黄金時代のそれには及ばないものの、16世紀末から17世紀前半の残存率よりも高い数値を示している。このことは、そ

の後、今日にいたるまで経過した年数の相違を考慮しても、この時代に宮廷詩人によって使用され、あるいは導入されたフランス語からの借用語が今日のドイツ語に及ぼした影響は決して小さいものではなかったことを証明している。

ドイツ語史の中ではじめて超地域的な言語を意識し、表現法の洗練された宮廷の様式の形成を試みた中世盛期の宮廷詩人たちの言語は、このための手段として、はじめてフランス語からの借用語を積極的に受け入れた。これが12世紀、13世紀におけるフランス語からの借用語の第一次隆昌期につながった。しかしその後の騎士文化の衰退と、中核のない言語多様化の時代への推移の中で、宮廷詩人たちの洗練された表現法を求めた言語様式とともに、フランス語からの借用語の流入も途絶えることになる。中世盛期の宮廷詩人語は借用語の観点からも、フランス語からの借用語の豊富なことと、またそれが古くより継続的にドイツ語に大きな影響を与えたラテン語を、しかもその力が全盛であった時代に、圧倒したことで、ドイツ語史の中でも特異な位置にあった。しかし新高ドイツ語標準語成立にいたる過程の中で彼らの言語を見た場合、この言語はまた異なった位置に置かれる。前述のように中世盛期の宮廷詩人たちはドイツ語史の中ではじめて超地域的な言語を意識し、これを彼らの書法に反映させた³⁰⁾。このことはその後の16世紀、17世紀にドイツ各地の書房でなされた書法における言語平均化の試みにつながった³¹⁾。また彼らのフランス語の導入と、それによる洗練された言語様式形成の試みは、17世紀、18世紀のアラモード (à la mode) なフランス語の氾濫と、それによる洗練され、豊かなドイツ語形成の試みに連続することになった。

注

- 1) Fritz Tschirch: Geschichte der deutschen Sprache, 2. Teil, 2. Aufl. Berlin 1975, S. 87.
- 2) Norbert Richard Wolf: Geschichte der deutschen Sprache. Bd. 1. Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch. Heidelberg 1981, S. 179ff.
- 3) Adolf Bach: Geschichte der deutschen Sprache. 8. Aufl. Heidelberg 1965, S. 206f.; Norbert Richard Wolf: a.a.O., S. 180.
- 4) Toru Suzawa: Ausgrenzung von Dialektalem und Altertümlichem? Zur Genese der höfischen Dichtersprache in der Stauferzeit. In: Göppinger Arbeiten zur Germanistik Nr. 583. Göppingen, S. 40ff.; 須沢通: 「ドイツ語史におけるシュタウフェン朝宮廷詩人語の位置づけについて」信州大学人文学部, 人文科学論集第28号, 1994年, 67~77頁
- 5) Hugo Moser: Deutsche Sprachgeschichte, 5. Aufl. Tübingen 1965, S. 123ff.; Hans Eggert: Deutsche Sprachgeschichte II. Hamburg 1965, S. 137f.; Fritz Tschirch: a.a.O., S. 65ff.; Peter von Polenz: Geschichte der deutschen Sprache, 9. Aufl., Berlin/New York 1978, S. 58.
- 6) Toru Suzawa: Ausgrenzung von Dialektalem und Altertümlichem? A.a.O.
- 7) Christopher J. Wells: Deutsch: eine Sprachgeschichte bis 1945. Aus dem Englischen von Rainhild Wells. Tübingen 1990, S. 129ff.; Norbert Richard Wolf: a.a.O., S. 181 u. 220.
- 8) Christopher J. Wells: a.a.O.
- 9) Norbert Richard Wolf: a.a.O., S. 181.
- 10) Ebd., S. 222.

- 11) Hartmann, Wolfram 以外については, H. Palander: Der französische Einfluß auf die deutsche Sprache im 12. Jahrhundert. In: *Mémoires de la Société Néo-Philologique de Helsingfors* 3, 1902, S. 75ff. [Vgl. die Darstellung bei Norbert Richard Wolf, S. 181.]
- 12) Hartmann von Aue: Erec. Hrsg. von A. Leitzmann. 5. Aufl. besorgt von L. Wolff. Tübingen 1972.
- 13) Hartmann von Aue: Iwein. Hrsg. von G. F. Benecke u. K. Lachmann. 7. Aufl. neu bearb. von L. Wolff. Berlin 1968.
- 14) Wolfram von Eschenbach: Parzival. 7. Ausg. von K. Lachmann, besorgt von E. Hartl. Berlin 1952.
- 15) Emil Öhmann: Der romanische Einfluß auf das Deutsche bis zum Ausgang des Mittelalters. In: Maurer und Rupp. 1974, I. S. 323ff. [Vgl. die Darstellung bei Christopher J. Wells, S. 130.]
- 16) H. Palander: a.a.O., S. 220.
- 17) Hugo Suolahti: Der französische Einfluß auf die deutsche Sprache im dreizehnten Jahrhundert. In: *Mémoires de la Société Néo-Philologique de Helsingfors* 8, 1929, S. 1ff. u. 10, 1933, S. 1ff. [Vgl. die Darstellung bei Norbert Richard Wolf, S. 220.]
- 18) A. Rosenqvist: Der französische Einfluß auf die mittelhochdeutsche Sprache in der 2. Hälfte des 14. Jahrhunderts. Helsinki 1943. In: *Mémoires de la Société Néophilologique de Helsinki* 14. [Vgl. die Darstellung bei Norbert Richard Wolf, S. 223.]
- 19) Alan Kirkness: Die nationalpolitische Bedeutung der Germanistik im 19. Jh.: Ersetzt statt erforscht - Thesen zu Lehndeutsch, Purismus und Sprachgermanistik. In: Wimmer 1991, S. 294ff. [Vgl. die Darstellung in "Deutscher Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart, Bd. II. 17. u. 18. Jahrhundert" von Peter v. Polenz. Berlin/New York 1994, S. 79.]
- 20) Toru Suzawa: Ausgrenzung von Dialektalem und Altertümlichem? A.a.O.
- 21) Ebd.
- 22) Peter von Polenz: Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart, Bd. I. Einführung-Grundbegriffe, Deutsch in der frühbürgerlichen Zeit. Berlin/New York 1991, S. 220.
- 23) William J. Jones: A quantitative view of Franco-German loancurrency (1575—1648). In: ZDL 45, 1978, S. 149ff. [Vgl. die Darstellung bei Peter v. Polenz (Anm. 19), S. 80f.]
- 24) Richard J. Brunt: The influence of the French language on the German vocabulary (1649—1735). Berlin/New York 1983. [Vgl. die Darstellung bei Peter v. Polenz (Anm. 19), S. 81ff.]
- 25) Norbert Richard Wolf: a.a.O., S. 221f.; Rudolf E. Keller: Die Deutsche Sprache und ihre historische Entwicklung. Bearb. u. übertr. aus dem Englischen, mit einem Begleitwort sowie einem Glossar versehen v. Karl-Heinz Mulagk. Hamburg 1986, S. 312ff.
- 26) buzzel (樽), doschesse (公妃), gramerzîs (謝礼), kumpânîe (同伴), lâttûn (レタス), mahinande (家来), passâsche (道), samlieren (集める), stîven (シャルマイを吹く), turkoyte (護衛), vermaldfien (呪う), flurs (花), florieren (飾る) u.a.m.
- 27) William J. Jones: A Lexicon of French Borrowings in the German Vocabulary (1575—1648). Berlin/New York 1976. [Vgl. die Darstellung bei Peter v. Polenz (Anm. 19), S. 81 u. 84.]
- 28) Richard J. Brunt: a.a.O.
- 29) Rachel K. A. Caughey: The influence of French on the German vocabulary 1736-1815. A

critical study of the literature with special reference to the "Deutsches Fremdwörterbuch". M. A. thesis, University of Auckland, N. Z. 1989. [Vgl. die Darstellung bei Peter v. Polenz (Anm. 19), S. 84.]

- 30) Toru Suzawa: Ausgrenzung von Dialektalem und Altertümlichem? A.a.O. 須沢通: 「ドイツ語史におけるシュタウフェン朝宮廷詩人語の位置づけについて」信州大学人文学部, 人文科学論集第28号, 1994年, 67~77頁
- 31) Peter v. Polenz: Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart, Bd. I, a.a.O., S. 166ff.; Rudolf E. Keller: a.a.O., S. 360ff.; Toru Suzawa: Ausgrenzung von Dialektalem und Altertümlichem? A.a.O.